へ13
2378
34

山東庵京山作

息子家賦自身持扇

歌川國丸畫図

遠 13
2378
34

此草子を文化十四年春四月京山上京の時ホの様んで三日三夜ホおぢつけらり作なる今年樟よ上まとき て再ホれを閲るホ首ハ戯作のおく朋ハ心学ホ似て尾ハ育脆ホ愕ざる戯言なれバ命ちあんまた笛ホ似ざり一亜ちきんふりぐもあれど一道の縁を絡バハ具の様図かぐまとちぐひて丸でまき書きまバたりとざるやホれて拙乃恨ハ樟上乃恥をさ匠の手拭硯の汙ゆ拭ふのを

文政二年 癸十月 山東庵京山

士
のだん
町人ハ
生まれあがり
身代と
鞘ぬくる
侍の身持扇
慰ハ其身を打る
まう少の誓ひ申良ごの
本望ハこびへで始終
質やの手代奉公心を彩く
くすく薬研荷鄙の一腰出世の種々べ
農
百姓ハ生れあがり者
身持扇 姉ハ世一代集
妹ハ
世ろ
尼ゐ
ゐる
墨
染櫻
ちりかゝる
身代ゐ花を
こらせ女房の
智恵ハ主の心と
ゐり久むや何事もつゝ中納言

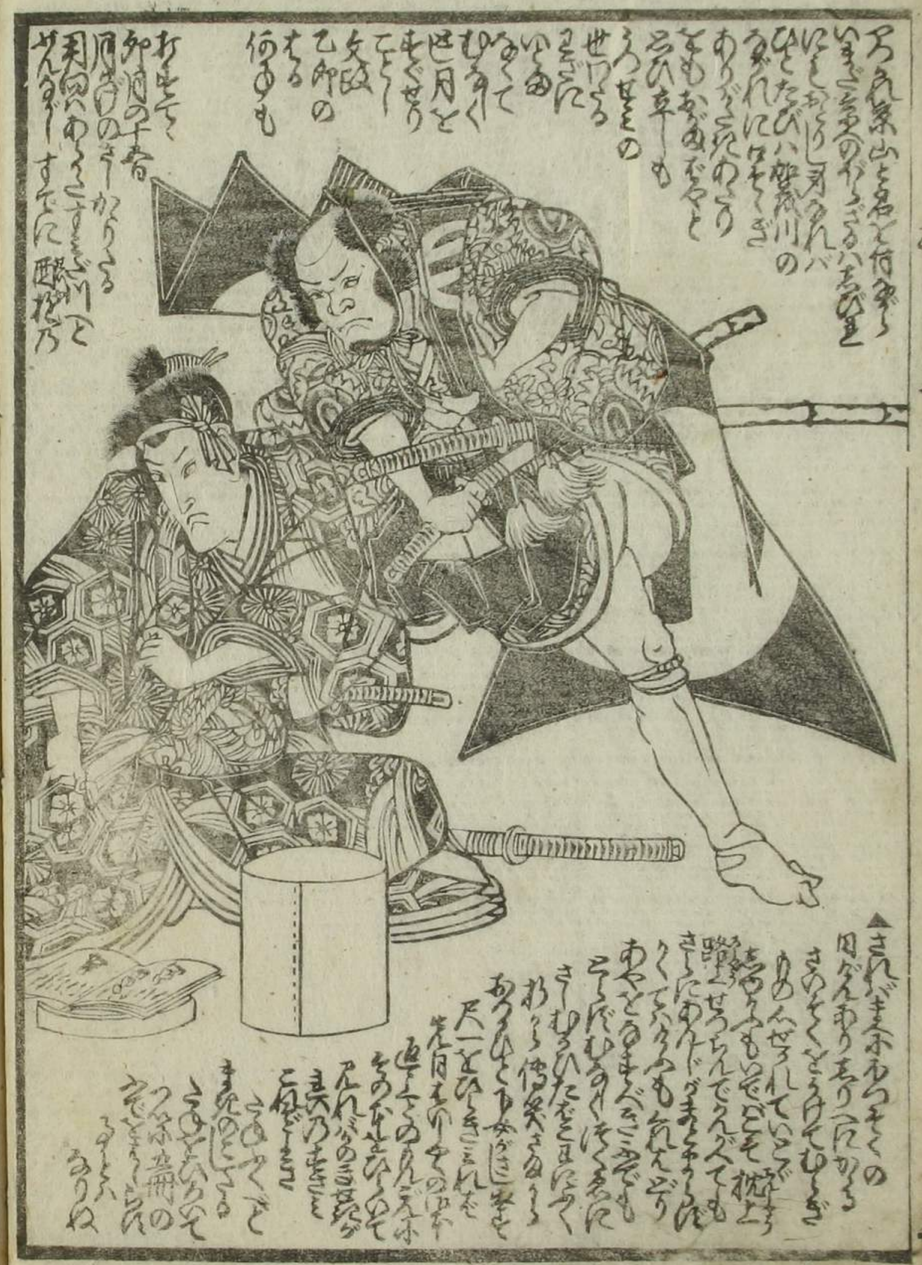
工

職人ハ生まれつき器用者ゆえ
身持扇
馬鹿ハつかる
薬やうる
大晦日のこんまい
初對面うり熱をうく
傷寒論の講訳娶のあくびハ
顰のうつるとうり親父も匙おけと
勘當人参

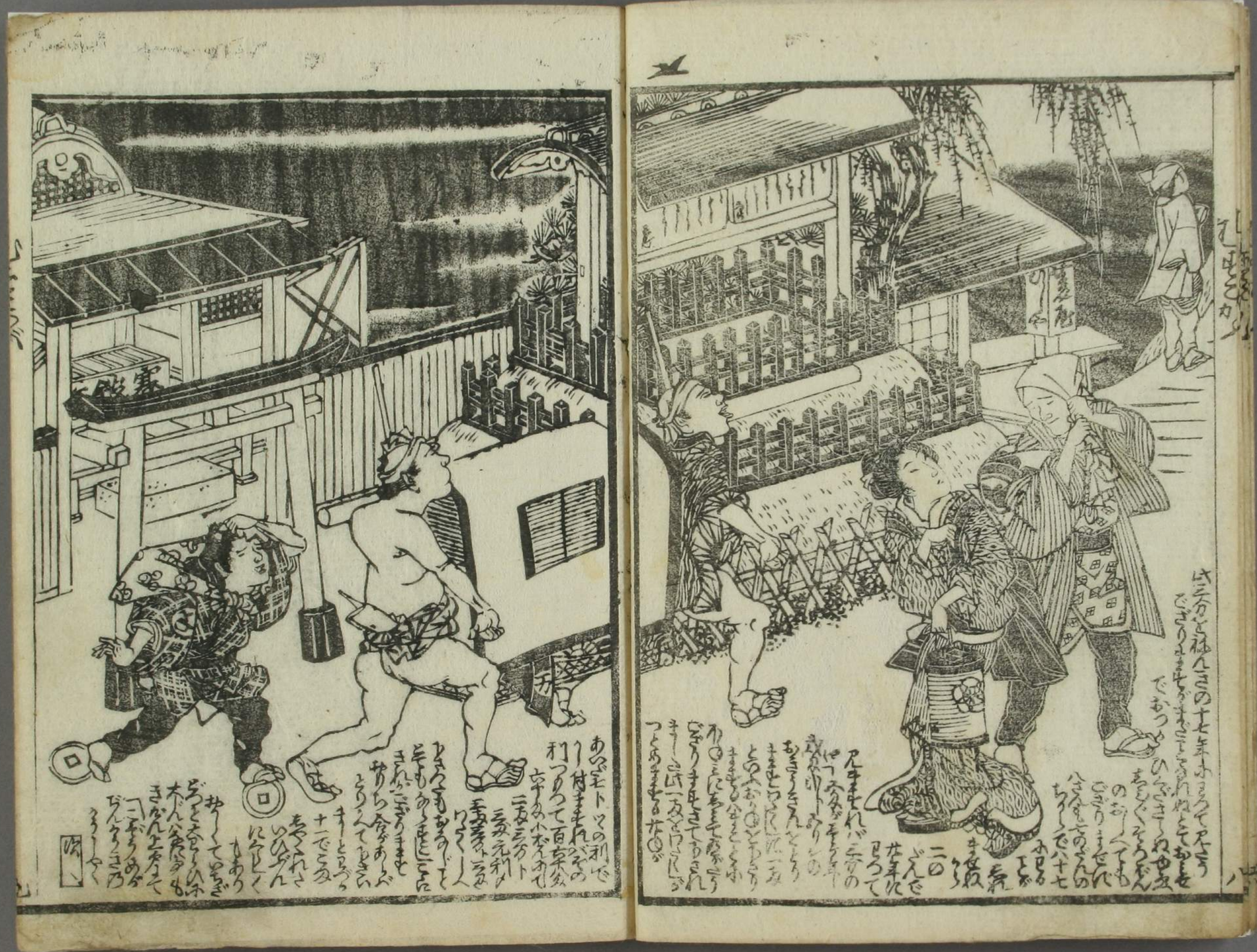
商

商人ハ生まれつき出家の身持扇
親類中がうり合て異見の女ハ念佛
馬の耳ハ風裏の花娶せつけぬ
聞のとり火油ぎらと壮五の
宿さがり手代がうりけるる
お十念
下女が
身
がうり
名号

在四回ハ後編の
目録来年の秋
出板いたし



二の まき



つづく あトをゆりとろこそよ
さろつきいどごとやおまろおえん
酒あーちーのくいきやとられて
「おやまえんホトさろきをあーつて
ホトんつきせバ」やあーつきろ
きなりそろん「おきさ〜
ふをとをあろんハかしじと
ちれがのひとこのこの
ちんざぶちうでらると
こをせーとあーそんバ
ホトんが「おきさくれさ
さろろきとどん三ふ
とられちやア女がろろく
ちんこハえやハ酒どやさ
こしろアおそれ山林て
のとぶどがく
まろーどんぎりで
のむあゆうのかをそろ
「ガそれハすくく
ハとそんどで
どんぎりト
ぢん三が
ヨぢりん
いちざ
ぞろと
ろきをて
ス大酒にそろそ
くてきろう

きもおきまりろろが
おどろくあけのたちのろもまろどろの
ホトんろれバさのおむろひとちやなの
男ときされをホトんーをきやのこをそて
「ろやおそろろハろーさ「ちのひけどろて
ロ「ビ」ろスおろまをて「おろ〜ヤはさ
「ヨ」く〜ろきふおれがかをたつをそ
ふそろろろけろまろーろぶ二丁
ろれてくろれ「ホの内でもさそう
ト「はさ」ヤ「三丁ハてもきまー」
「ヨ」し〜「ヤ」ホハんろ火をつ〜
ちをまも休むんろふつきこれより
まんなろろむろ小おきれて
ろへきろりをまが月おろく
ちろくて木ホんを出ホまで
おろるも出大ひろのあーちをせん
さてかのーくちろハのろる
きまあのホおんをたきーあ
茶屋の二ろのホ袖てゆーしが
ての女房ホおろきれて目を
をそろりあーーもをところの内で
ホをんをあろろてーろをろてふホ
女房が「ちをんハまんんあさんホ
ろーこハ」てちろをーホまに
ぞんろとあろ一まに
ろるのしやときろてーくちろ
「ろ」そのかをろ代ハろんがでござり
まをとハんバ「そりやなきんろきろのでものと」

「ハのくいたのる
そのの代ろ代ハ
きちをまれあり
そをきてきまをう
とあバをそして
ホやハおくと
ありひしに
ろろるろの
でちホろり
ホををろう
ホーくの
そハをしやと
さびひろ

欲の川

三乃まき

文二口

いろと

六
五

山東庵京山作

身持扇
京山作
國丸画
板甚丸春乃辰

身持扇後編

京山作　國丸画

文政庚辰之春

書肆　岡壽堂梓

六十八上の日
光もものすごく
三分のまこと
そもそも月の
さいごまで
女のそむかず
とるれば
まるのおきぬ
のどんやたろう

「なるほどこれハ
正ごんであらう

▲三千金とうハ天ぐんの
四ぎんでござりまして
まづ天ぐんでいふと
ぬけたらい　さぎて
きてこそ
うそぶいて
「こりゃ天ハなのれハ
ろくろのめじゃか
ぬけつると
そもそもそもも
ぐてんせば
「うそつきあ
ゆくえんかもれと
ぬけた　ちろつけ
「あるきこう
いつつしゆう
もりこと
えぶりうれが
ゆくハこあ
いろくろ
きこえんひけのハ
めけ万ハが
ハあり

「これハくらんざハさあーこと
のうぞこられやーこさて
おりもうちゃんぐあそで
これまでおいでにおつくのと
さてくもあやうぶもまもやうか
ちそでこうまいにこさにおいらも
今日ハあ三ちのあ年ーえ
おちそにめされまーこと
あるこおいであそぐーこう
このけものとお月からのろと
ヤーつけてこなにいあで
ヘートつきれるいあで
ちーこハたくべえ
「せんりうたくりあけいと
ごんあえるうこれば
えこさいといつく
りーこさに人ぐうびあげにも
ならふぐるんと後ごんハ
ちとひけこうふか
「のへさせんぐうもヤーとまーこと
とをりーぐうに三十金で
ちーこりうにこうまーこので
ござりまーもおえるのーハ
これざりうぐいうこさあへハ
五十金とヤて出まーこと
ろうこい金あまのとも
ヤーこまーもをので
ござりまーもグ▲

「大きあ
いつろうぶ
ちうま
芸
ぜんハ
十上年

「そもう
きろこ
あごで

ーのうこに
ろうまーこので
なぐりヤたに
りあのぞこ
もぐきーこハ
八あ分も
つくハ
まれ
まーこ
えぐうこ
さあへ
叫こと
ヤも
ろくり
おぐども
赤やぐ
お菓ふ
ふれ
こと
ヤも
大の
こと

モシワタクシカ
ヤマヤマヤ

山東京山戯作
歌川國丸画

筆耕德瓶

文政三年辰春新版絵双紙目録

息子家賦身持扇 全五冊 山東京山作 歌川國丸画

音尾傳 おとく有恋節 全六冊 山東京山作 歌川國丸画

きぢきぢ

三人若衆猫撫 全六冊 東西庵南北作 柳川重信画

繪本東都喜作 三冊 山東京山作 重工名 家合作

子宝船七人兄弟 全六冊 山東京山作 柳川重信画

假名茶話 文詰 京山作 本

右のごとく出板いたしべく候 仕入れ申し候上は 一つ目 珊瑚 碎 一色百匁 右京山製 丸次仕小

十三味茶あびと 氷晶粉 いうと白く むで 一色一匁 一つ目茶 珊瑚碎 一色百匁 右京山製 丸次仕小

地本 芝神明前 同屋 丸屋甚八